

# 史料報

第 40 号

昭和59年 3 月

## 歴史資料の保存科学

江 本 義 理

〔東京国立文化財研  
究所保存科学部〕

ここで言う歴史資料とは、各種の文書として取扱われる、いわゆる古文書類の文献資料のほか、遺跡から出土している木簡、漆紙文書や金石文等の類、典籍、書跡から、絵巻、絵図や絵馬のような民俗資料的なものまで含めた、広範囲のものを対象として、お話を進めることとする。

従って、文献資料の整理保管に関する科学的な処理法より広げた、すなわち、文化財の保存科学の内容について、上述の対象に関する部分を御紹介する。

文化財の保存科学の内容として、一、材質・構造と劣化現象、二、保存環境、三、保存処理の三つの柱を立てている。

第一の材質に関しては、先づ、そのものが、どのような材料で構成さ

れているか、製作年代の判定等、文化財としての価値の判定、または認定をする。

材質分析は、貴重な文化財であるので非破壊的方法によるのが原則であり、絵画を例にとれば、蛍光X線分析、X線回折分析を主流としている。前者で成分元素を検出し、後者で結晶構造を明らかにして、化合物としての同定を行ない、使用されている顔料を判定する。また感度のよい分析技術を応用し、精密測定を行なつて、主成分、微量成分の特徴をつかみ、製作年代、技法、産地の推定等が行われている。

構造・技法等の説明には、光学的方法が用いられる。X線透視写真により下塗りの状態や、技法を知り、赤外線吸収作用を応用して、油煙

## 目 次

歴史資料の保存科学

史料の装備と配架(統)

江本 義理……(1)

歴史資料保存利用機関連絡協議会

原島 陽一……(4)

総会及び研究会参加記……(7)

史料所在調査報告……(10)

文書目録の編成に関する一、二の問題……(12)

昭和五十八年度新収史料紹介……(10)

受贈図書・彙報……(8)

等で汚損された銘記の判読や、下絵の検出が行われる。また紫外線はその蛍光反応から、顔料、油、膠等の使用材料の判別、補修箇所の検出等に利用されている。画像処理等のリモートセンシングの手法を取入れることにより精度が向上し、今後広範囲に利用されるであろう。

## 保存環境

文化財(歴史資料)の材質を劣化させる因子は、光・水分・熱・汚染ガス・微生物・食害虫である。これらによる劣化現象と、保存のための環境の適正条件の設定および、それを保持する研究が必要である。

(一)光 光による劣化は、紫外線、可視光線の短波長側の青色によって彩色の変退色が起り、特に漆、染料は紫外線による劣化が著しい。赤外線による劣化は、輻射熱によって表面温度が上昇するため乾燥し、歪が正じる。

(二)水分 空気調和が行われていて、

資料に含まれている水分と、空気中の水分の平衡が保たれていれば、物から水分の移動はない。木、紙、布等の吸水性のあるものは、水分を吸収または放出する時変形が生じたり、接着部分のはく離が起る。

(三)熱 極端な火災時の高熱による影響を除けば、温度変化は湿度変化と密接な関係にある。

(四)汚染因子 空气中に含まれる有害ガスは、炭酸ガス、硫酸酸化物、硫化水素、有機硫黄化合物、窒素酸化物、オゾンなどがあり、粒状物質として浮遊粉じん、降下粉じん、液滴、煙霧質があることはよく知られている。これらは酸性またはアルカリ性物質として作用し、腐食、汚損材質劣化などを促進させるなどの影響を与える。

## (五)生物因子

わが国の文化財は、わが国の地理的および気候条件と、木、紙、布などより構成されているものが多いため、欧米の文化財に比して脆弱であ

り、生物劣化を受けやすい弱点を持っている。

イ、食害虫 食害昆虫は九種類(目)ほど知られ、そのうち最も大きな害を与えるものは、建造物に対してはシロアリ、美術工芸品に対してはシバンムシやキクイムシの類である。古文書・書籍類についてもシミよりシバンムシの害が多い。

ロ、微生物 菌類の害としては、木材腐朽菌、木材変色菌によるくされに伴う崩壊、汚損が多く見られる。またカビの分泌物による汚損や劣化は、空中微生物に多く含まれるもので、粉じんの防除の管理が必要である。

#### 変質・劣化現象

上述の因子は単独に、また相乗的に作用し、文化財に機械的、化学的な影響を与え、劣化させて行く。

(一)絵画 特に日本画は、顔料粒子は近接点でのみ隣接粒子と接着されており、粒子の表面が空気に曝されているので、光や高湿度の影響により、退色が起こり、膠は湿度に大きく伸縮し、その繰り返しと、表面に偏在しているため、彩色部のはく剝が起こりやすい。水彩画も同じケースであるが、油絵の顔料粒子は、油

層に包まれて、空気から遮断されているため、日本画より影響を受けにくい利点を持っているが、日本のように高湿の場合は、光との相乗作用で、油や顔料の変質や退色を起こす。

(二)彫刻 木彫のうち針葉樹古材は、湿度変化に応じて木口部の収縮率が高く、割れが生じやすい。一本造りの像は干割れが生じているものが多い。乾燥により割れが拡がり、復元には長期間を要する。寄木造りの像は、各材の収縮率の差から、はぎ目によるみが生じる。

(三)漆工品 器体は絵材が多く、漆膜自体も急激な乾燥や繰返し乾湿が加わると、はく離が起こる。また漆は紫外線による劣化が著しい。

四 染織品 絹製品が多く、本質的に劣化が早く、低湿度ではもろくなる。数百年を経過したものはすでに命脈がつかせているといっても過言ではない。植物染料で染色したものは、特に鉄媒染のものは、生地を劣化させる傾向があり、一般に変色が著しいことが知られている。湿度の高いほど、光による退色が大い。

(四)古文書類 紙の耐久性は繊維の化学的性質に影響される。洋紙は原料が木材パルプであり、木材パルプは不純物が多く、機械により繊維が

不当に傷つけられ、サイズ剤や充填剤として添加された化学薬品や添加剤などが、繊維のセルローズやリグニン、ヘミセルローズなどの変質を助長する。和紙の原料であるじんび

繊維は非常に長く、そのセルローズ分子もそれに比例して長い。しかもリグニンの含有量も微少である。和紙はこのじんび繊維をきわめて緩やかな条件で、時間をかけて処理(叩解)するため繊維は損傷されることなく精製される。そして純粋なセルローズが、何も添加される不純物もなく自然のままに紙に漉き上げられている。この両者の差が寿命の差に表われている。

近年問題視されている崩壊に瀕した古い書籍の大部分は、機械パルプで作った安価なもので、硫酸アルミを多量に含み、高湿条件で分解して繊維を酸加水分解する。酸性紙を長持ちさせるには、アルカリで中和することが考えられているが、繊維の途中で中和することは難しく、手間と時間がかかり、何百万冊もの書籍を処理することは不可能に近いであろう。

(五)その他 金属製品は塩化物の腐食生成物を含むものは高湿度下では腐食が促進され、特に銅製品の場合、

青銅病と名がついている程著しく、崩壊につながる場合もある。

石造品、土器などが可溶性の塩類を含んでいる場合も塩類風化を受け

る。また木箱に収納した石造品、粘土製品、金属器などが、木材に含まれる有機酸に侵され、酢酸塩やギ酸塩を析出し表面を傷つけた例がある。針葉樹の材の場合、樹脂による汚損があり、桧材に納めた金属器が、全面ヤニでおおわれ、ベタベタになった例もある。

#### 環境条件

(一)上述のように我が国の文化財は、保存のためには厳しい環境に置かれて、しかも脆弱な素材によって作られている。これらのことを勘案して、安定した空気調和を期待し得る場合、標準的条件として、温度  $20\pm 2^{\circ}\text{C}$ 、相対湿度  $50\pm 5\%$  をふさわしいものとしている。細かくいえば、資料は個々に別々の保存されていた環境の履歴により、適正な条件がある。

また金属は乾燥しすぎて干割れが入るようなことはないから、低湿度でよく、漆芸品、木製品の類は幾分高湿度に設定すべきである。

ケース内空間を密閉にして、湿度

調節ゲルによる湿度調整も工夫されている。ここで用いられるゲルは、天然ゼオライトを特殊加工したものであらかじめ希望する湿度にシーズニングしておけば、温度変化によるケース内の湿度変化は、ゲル自身が水分を吸収、または放出して調整してくれる。分量は $1\frac{1}{2}\sim 3$ を標準としている。

(二)照明 人工光線による照明は、近時著しい発展を示し、光源には各種あるが、一般に展示照明に用いられているものは、蛍光灯とタングステン白熱燈である。白熱燈は演色性はよいが、熱を伴う。従って赤外線吸収フィルターを使用すべきである。蛍光灯の光は原理的に紫外線が含まれるので、無紫外線処理を施したもののか(退色防止などの表示がある)、紫外線吸収フィルター、フィルムまたは塗料を使用して、紫外線を除去しなければならない。

照度は、日本の絵画・染織品・漆芸品は光の影響を受けやすいから、照明の明るさを制限すべきで、一般に二〇〇ルクスとされ、絵画は一五〇ルクス以下、染織品、版画は一〇〇〜五〇ルクスとされている。資料の材質に応じて撰択すべきである。

照度以外に露光量からも制限が加えられる。退色と材質劣化の危険度が大きい絵画、染織品は年間一ヶ月の展示を限度とし、特に貴重な作品は年間二週間、さらに脆弱なものは、三〜四年に一回しか展示公開しないというように、作品によってランク付けがなされるべきである。

#### 虫・被害対策

(一)診断 資料が昆虫に被害され、虫孔から虫粉が排出されているのを発見した場合、ただちに加害虫の昆虫を採りて採取し、種類を同定して、防除処置を施さなければならない。害虫を現場で採集するのが困難な場合が多いので、食痕や虫糞の形状から推定することもできる。微生物に対しても孢子、菌糸またはそれらしいものを認めたら、注意して採取し、培養、分離して種類を同定して、それに適した対策を考える。カビなどの発生を認めたら、いきなり払ったりせず、必ず殺菌処置をしてから清掃をする。

(二)防虫剤 パラジクロールベンゼン 40g/m<sup>2</sup>

(三)防黴剤 パラホルムアルデヒド 4〜13g/m<sup>2</sup>、チモールも用いられる。

四殺虫・殺菌処置 被害の進行を早急に阻止することが大切で、即効性の燻蒸剤を用いて、燻蒸を行う。この際、資料自体に悪影響を及ぼさぬことが前提条件であり、十分留意して、燻蒸剤の選択を行なっている。

イ、燻蒸剤 食害虫に対しては、臭化メチルを用いる。使用条件は、気温 20〜30℃、燻蒸時間 二十四時間の場合、35〜50g/m<sup>2</sup> 使用するのを標準としている。カビに対しては、臭化メチルと酸化エチレンを8:1(重量比、"エキボン")で混合したものを用いている。薬量は、気温 20〜30℃、燻蒸時間二十四時間の場合、100g/m<sup>2</sup>を標準としている。

#### ロ、燻蒸法

a、減圧燻蒸 小型の木彫、絵画工芸品、書籍等に対し、減圧釜による減圧燻蒸を実施している。ガスの拡散、浸透が迅速であり、害虫に対する致死効果が向上される。従って、燻蒸時間が短縮され、資料がガスに接触する時間も短く、影響の心配も少なく、非常に効果的である。減圧時、装置内の湿度低下を防ぐため、加湿装置を必要とする。

b、密閉燻蒸 収蔵室が被害を受けた場合、資料をまとめて室ごと燻

蒸する場合に、室の扉、窓等の隙間を目貼りして燻蒸を行なう。

c、被覆燻蒸 厚さ〇、三ミリ程度の厚手のビニール引きナイロンシート(ナイロンターポリン)で被覆して、すそは重しをして密閉度を高め燻蒸する。大規模の場合は、建物全体を被覆し、小規模の場合は、室内で枠を組み、その中に資料を入れ、上から被覆する。

#### ハ、吸収装置

燻蒸処理後の残留薬剤は、活性炭を充填した吸収装置をとおして、安全計容濃度までガス濃度を低下させてから、排出を行なっている。

#### おわりに

以上、歴史資料の管理、保存に関する自然科学的な方法の概略を記したが、科学的な方法は日進月歩であり、改良が重ねられて行くであろう。しかし科学の力で積極的な予防対策を施した場合、安心して管理をおこなうようなことになつては、むしろマイナスである。昔から文化財の取り扱いの心得に、「目通し、風通し」なる言葉が語り伝えられている。自身を目で確めて、管理を行なう心構えこそ、科学的な態度といえよう。

## 史料の装備と配架(続)

原島陽一

畳紙には紐の部分が弱い欠点があることを前に指摘したが、史料の種類によっては、昔から利用されてきた畳紙の形式にも捨てがたいものがある。例えば、大形の地図類などを封筒に入れようとすると、封筒の底にあたる部分のところで史料の隅がまかれて折れ曲る怖れがあるが、畳紙ならその心配は殆どいらないう。隅のまくれを防ぐためならば、畳紙に限らず帙でもよいわけであるが、わざわざ帙を作るほどでもないとか、帙の下半み、あるいは予算の都合によっては封筒よりも畳紙の方が適している場合があると思う。一枚の紙に包むだけでも装備の一種といえなくはないが、利用のたびに包みなおすのは面倒であると同時に包み紙の損耗が激しく、その上、紙包みのままでは取扱いが不便だから紐で縛る必要も生じるなど、包み紙の装備は実用的といえない。これに比べると畳紙には、それなりの効用を認めてよいだろう。但し、付属の紐や、紐の付着部分を強化したり、畳

紙の紙質に留意するなどの改良をはかる必要がある。史料の大きさや目方によっては、持上げた時に撓みができる。持ちにくいだけでなく史料のためによくないので、畳紙の底部に厚紙を敷いて補強すれば安心である。

◇ ◇

装備の種類としては、右に挙げた封筒と帙それに畳紙が主たるものであり、ことに封筒はさまざまな形態のものを入れることができるが、やはり史料の形態に応じて適切な装備とするのが基本原則であろう。

例えば、折帖や卷子本を封筒に入れることもできるが、本来なら各自にふさわしい装備にしたい。とくに卷子本は寸法に合った箱に入れた方が保管にも便利である。箱の素材を木製にするか紙製にするかは、予算とも関係するので史料に応じて決めればよいだろう。卷子状の史料は多くないが、系図などを中心に伝存品があるので、特別な装備法を定めておいても無駄ではあるまい。市販の

紙筒を利用してもよいが、棚に並べた時にやや不安定であり、また、表紙がこすれないように覆い紙をつけておきたい。なお、卷子本について付言すると、表紙の紐(または緒)を巻く部分が損傷しやすく、ことに爪をつけたものはそれが当る部分がすり切れるし、爪のないものでも巻き止めるために紐をくぐらせる箇所が一定位置になるので、その部分の表紙が傷んでくる。これを防止するため、紐を巻く部分に帯状のあて紙をつけることが、従前から行われている(専門用語で巻紙と呼ぶ、軸物の巻緒の下にあてるものは巻紙または巻止めといっている)。あて紙は、紐の幅に応じて五〇八分、長さは卷子の外周より三寸ほど長めに作り、これを卷子の紐を通して端を表紙竹の内側に折り込んで、ぐるりと巻きつけ、その上に紐を巻くのである。ただし、これでは巻紙の部分だけ表紙の褪色に差が生じる怖れがあるから表紙の幅に巻紙をつけてもよい。

このほかの特殊形態の史料にも、整理と保存との両面を充足できるような適合した装備にしたい。そのなかで、史料としては決して珍しい形態ではないが、横長形の帳簿類の装備について未だ簡便な解決策を見出

せずにいる。一冊ずつに帙を作ればよいようであるが、横長形帳簿の厚さにはさまざまあって、二・三丁の薄い帳簿にもすべて帙を誂えとなると、費用が高むだけでなく書庫の収容能力にも影響を与えることになる。薄いものは封筒で処理してもよいが、そこにも問題がある。当館では、長い帳簿を二つ折にして封筒へ入れた時代があるが、好ましくないことはいうまでもない。史料の一部が封筒からはみ出して汚損や埃のたまるのを防ぐためであつたが、やはり原形の変更に避けるべきである。

そこで、前号に紹介したように長大形封筒を追加したのであるが、底が深いため前述の大形地図で指摘したのと同様に史料の隅がまくれ易い。長大形と同じ大きさでタテ・ヨコを逆にして、開口部の広い封筒にする。と史料は入れ易いので一案であるが、配架した時に埃が入ると開口部が広がるのが欠点である。洋装本の外箱に似たケースは収納や配架には便利だが、史料の厚さが一定でないからケースの幅の調整がむづかしく、試作の域を出ない。前回紹介した紙帙の横長形を用意するのもよいと思うが、薄手の史料には装備が過大な感じを否めない。

というわけで、この解決も今後の課題である。その場合、形は同じでも厚さが違えば装備も変えることを前提に考えるべきであろう。

史料館では、以上に挙げた装備のほかに、簡単なボール箱を用いている。大きさは、幅35×奥行20×高さ5<sup>1</sup>/<sub>2</sub>と45×20×7<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の二種類で、折り曲げ式の蓋をつけ、蓋は鳩目留具に紐をかけて止めるようにしてある。何通かの書付を綴じて束にしたような、状差し形式の史料を入れるために特製したものであるが、封筒などの装備では不都合なものにも利用している。前述の横長帳簿で大きさが適合するものはこの箱が使えるが、すべての横長形に應用できるほどの融通性はない。

#### ◇ ◇

なお、最近関心を呼んでいる酸度による紙の劣化が装備に及ぼす影響として、酸性の装備用紙が劣化していく過程で、これに密着している史料に反応して、いわば巻添えにする形で史料に破壊が及ぶことにふれておきたい。現在のところ、被害の具体的報告は未だ無いのだが、理論上は起り得る変化だということなので見逃すわけにいかない。対策としては、装備用の封筒や畳紙の用紙を

弱酸性ないし中性の洋紙で作ることで一応は解決できるはずである。だが、現実にはそうした用紙を使用しようとしても、需給バランスの不均衡のため直ちに実行しにくい状況にある。だからといって傍観していられないので、早急に打策を講じる必要を痛感している。酸性劣化を防ぐだけなら、封筒類を和紙で作ればよいわけであるが、強度や耐久性などの点で装備用品としての適性に疑問が残る。従って、装備用紙を和紙に切替えて済むことではない。中性のクラフト紙を自由に使用できるようにすることが先決ではあるまいかと考えている段階である。

この問題への関心もたれるようになって日も浅く、しかも書籍用紙の崩壊から出発した経緯もあって、われわれの立場からすれば、洋紙を使用している近代史料そのものの保存が優先して検討されねばならぬことは当然である。それさえもまだ十分とはいえぬ現状では、装備用紙への関心が不足しがちであるのも無理はないが、装備用紙の酸性劣化が史料に及ぼす影響を科学的に追求することを含めて、装備用品の品質管理に一層の配慮を加えたいと思う。

ただし、史料の保存には多くの要

因が関与するので、装備の封筒に中性紙を使用したから安全だとはいえず、全般的な保存環境を整備するなかで酸性紙の劣化に取組むべきことはいうまでもない。従って、単に用紙のみに限らず、帙を作る時の布や糊、木箱ならば材質や結合方法、とくに樹脂の出る用材に注意することなど、すべての装備について点検を怠らず、常に史料保存にとって効果的であることを優先させたい。

これと直接の関連はないが、同種の史料を結んだり束ねたりすることも広い意味での装備と捉えるなら、結ぶ素材や束ね方にも注意したい。ホチキスで綴じるのは論外だし、ゼムクリップや輪ゴムの使用も、警告が行届いたとみえて最近では殆ど見られないが、史料調査の折などにゼムの錆やとろけたゴムのついた史料に出会うのは、不注意の痕跡であろう。この種のもので意外に見逃されがちなのは、新しい麻紐の油性である。試みに白紙を麻紐で縛っておけば、二日位で結果を発見できるだろう。

#### ◇ ◇

段ボール紙などで作った大型の箱は、少量の家文書を一括しておくのに便利であり、多量のもの分納し

て用いられる。史料はすべてこの箱に入れて書庫に収納されるわけで、採用している保存機関が少なくない。箱の大きさは機関によって一定しており、書架に配架した時の整頓状態がよいし、利用者が某家文書の全体を閲覧したいと請求した場合にも出納が容易である。いずれにしても、大型箱の用途は、一紙類を封筒などに入れた上で、それらをまとめておくために利用されることが多く、二次装備とでもいうべきであろうか。この種の容器の使用は、有名な東寺文書の百合を引用するまでもなく、収納法としては古くから知られており、改めて効用を述べるには及ぶまい。

ただ、同型の史料の場合には問題ないが、大小厚薄の各種の形態の史料が混在する時に、個々の史料を早く検索しにくいのが難点である。これを解消するには、蓋の裏に配置図を示すとか、数点の史料をさらに一括するとすれば、多少は検索に便利であろう。しかし、この方式に従うなら返納時にも必ず元通りにしないと却て混乱することになる。一箱に入っている史料はそれほどの量ではないから、余り気にしなくてもよいといえるかもしれない。また、複

数の箱から一点ずつ出納するのに多少の不便があり、一箱に一家文書とすると少量の場合には空間が多くなるが、これはやむを得ない。

それよりも、現在使用されている大型箱の多くは段ボール紙製であるが、段ボールは吸湿性がよいので、書庫内の温湿度管理が不十分だと箱内の湿度が上昇することを注意したい。ことに、スチール製書架では、棚板の結露現象と相乗されて湿気を帯び易くなる。これを防ぐには、棚上に木片をおいて箱が棚に密着しないようにすると、通気性を増すので効果があると、保存科学の専門家が指摘しておられる。なお、当史料館では大型箱を使用していないので、具体的事例をもち合せていない。従って大型箱についてこれ以上述べるとは差控えておく。

◇ ◇

最後に、装備と配架との関係である。史料の保管にはいろいろな方法があるが、保存利用機関などで最も一般的な書架形式による配架で考えてみる。配架のうち、大型箱のような二次装備を施す方法は前述の通りで特に追加すべき問題はない。これに対し、棚の上に史料を直接置く場合に最も関心をよせられるのは、冊

子型史料を縦に並べるか横積みにするかということである。一般に和本は棚板の上に小口を手前にして横に置くことになっており、和装形式の史料もこれに準じて横積みしようとするのは常識的論理といえる。しかし、和本を横積みするのはセットものの同形の本を基本としているのであって、大きさの異なる本を交互に積み上げるとは和本といえども考えられない。前回、帙のところで述べたように、一冊ごとに独立していることの多い史料には無条件に横積みを用いできない。まして、保存利用機関での頻繁な出納を前提にすれば、寧ろ横積みによる被害が心配である。史料でも小口書きのある数冊のセットものは横積みにして構わないが、基本は縦積みにした方が保存上も良好なように考えられる。

ただし、それには条件があつて、史料をむき出しのまま縦配架してよいというのではない。表紙のない薄い史料を立てておけば曲つてしまう。だが、二、三丁の仮冊子形態の史料も封筒に入れば縦積みには耐えられる。この意味でも、史料の装備は欠くことはできず、しかも装備が扱い易く保存に効果的であるように検討を加える必要があると思う。

## 歴史資料保存利用機関連絡協議会（史料協） 昭和五八年度総会及び研究会参加記

史料協の昭和五八年度総会及び研究会は、去る10月27・28日の両日に新大阪駅からほど近い大阪ガーデンパレスを会場として約百名が参加して開催された。一日目は午前中が総会で、午後は全体研究会、二日目は二つの分科会に別れて研究会のあと全体の報告会に移り、午後は大阪築城四〇〇年まつりを中心に視察するという日程であつた。

参加者もそれぞれに深い関心を寄せていたように見受けられた。ただ、毎回のことながら日程の割に報告数が多いため討論の時間が短く、折角の報告に十分な討議のできないのが残念であつた。

この点については、事務局はもとより会員も了解しており、今度の総会で、年一度の全国大会のほかに地区ブロックの研究会を開催しようという提案が、原則的に賛成されたのもその打開策の一つであろう。県立の保存利用機関さえ未設置の県が多い現状では、ブロック研究会の実行にも多少の困難が予想されるが、是非実現させてほしい。来年は創立十年を迎える史料協が、独自の課題に取組む必要は内外ともに強く要望されるところである。そのためにもブロック研究会などをテコに、一層の充実をはかり、斯界の進展に寄与できるように期待したい。

最後に、今回の総会が事務局と大阪府総務部の絶大なご尽力とご支援のもとで開催されたことを報告して感謝したい。（安沢・原島記）

# 所在史料 調査報告

和泉国 熊取谷五門村中家文書  
日根郡 熊取谷五門村中家文書

(現、大阪府泉南郡熊取町五門)

昭和五十八年八月五、六、七日の三日間、本調査を実施。立命館大学文学部教授三浦圭一氏、同大学院生高木博志氏、同学生渡邊隆男氏、同聴講生小島正亮氏に調査員を委嘱し、また、大阪大学大学院生寺脇恵氏、奈良女子大学大学院生前田美佐子氏、立命館大学学生白鳥操氏、同池田佐知子氏、同見城梯治氏の御協力を得た。当館からは安澤秀一・広瀬睦・大藤修が参加した。なお、調査に当たっては、熊取町教育委員会社会教育課係長の田中豊一氏にいろいろ御世話いただいた。氏ならびに、暑い最中、公民館に罐詰めとなり、しかも朝・昼・晩とも仕出し弁当という「おしん」のような生活に耐えながら史料整理に当たられた調査員・協力者の方々には、改めて心より御礼申し上げたい。

熊取谷は大阪湾の東方に位置し、南方には和泉山脈の一部である雨山があり、東方は和泉山脈の山麓地帯で、東南より西北に傾斜した丘陵台地となつて狭い海岸平野部に接している【熊取町の歴史】(1)。中家文書中の「家祖之覚」によると、始祖盛晴については「姓藤原称中左近、泉州熊取谷之郷土」と記され、二代目盛秀は文治五年(一一八九)没となっている。この記述が正しければ、中家は一二世紀から熊取谷に居住していたことになる。後白河法皇が熊野御幸の際に中家に臨御せられたという伝承も、時期的には符合する。中家の当主は代々「中左近」を称している。中家が遅くとも鎌倉時代末以降、当地方における有力な地侍であったことは史料的にも裏付け得る。正和五年(一一三六)を初出として売券が大量に伝存しており、全融活動によつて田畠屋敷を買い集め、加地子を集積して地主的地位を築いていたことが知られる。一五世紀後半期頃から紀伊国の名刹根来寺の氏人となり、根来寺の一子院であつた成真院と深いつながりを持ち、子弟を院主として送り込んでいる。そして中家は、和泉国にあつて、この成真院の田畠支配の代官的役割を果たしていた(三浦圭一氏「根来寺と和泉熊取の中家」、『中世民衆生活史の

研究』所収)。桃山時代の建物と推測される中家住宅の一部が今日も残っているが、その豪壮さは住時の権勢の強大さを偲ばせる。

天正一三年(一五八五)三月の豊臣秀吉の根来・雑賀攻めに際しては、中家は和泉国南部地方の土豪・有力農民と結集して抗戦したが、十万に及ぶ大軍の前に惨敗を喫した。しかし幕藩体制下に組み込まれて後も、中家は岸和田藩主松井氏の郷士代官となつて、熊取谷における支配権を留保していた。その後、寛永一七年(一六四〇)に岡部氏が岸和田城主となると、郷士代官は廃されたが、七人大庄屋の一人に中家も任ぜられ、明治維新までその地位にあつた。

以上のように中家は古い由緒を持ち、従つてそこで伝存されてきた文書は膨大な数量に上る。中家文書の現在の所蔵者は熊取町在住で中家から嫁がれた道明かよ氏であるが、中世・近世初期の文書以外は熊取町教育委員会(熊取町朝代二二六―二二)で保管されている。前者の文書は三浦圭一氏が長年にわたつて整理の勞をとられ、後者の文書も数年前から寺脇恵氏が精力的に整理を進められてきた。今回の調査では、それを引き継いで約千二百点の文書を整理目録化したものの、未整理のものが大量に残ってしまった。これまでに整理済みの文書について、以下簡単に紹介しておく。中世文書は約千点あるが、大部分は売券である。近世初期のものでは、文禄検地帳写、慶長期の各村の名寄帳、元和・寛永期の御給人算用帳等が存する。中期の文書は少ないが、その理由は中家文書の性格を考える上で今後の検討課題となろう。文化以降になると多種多様な文書が大量に存する。幕末期に尊攘運動に挺身した中瑞雲斎関係の文書もかなり見られる。また和漢の蔵書も千冊余り存し、かなり高い教養を有していたことがうかがわれる。

なお、道明氏宅の文書は、事情により、今のところ一般者の閲覧は許されていない。教育委員会保管文書も、まだ整理が完了しておらず、閲覧体制も整っていないので、閲覧には限定的にしか応じられない事情下にある。閲覧希望者は予め教育委員会に問い合わせていただきたい旨、付記しておく。

(大藤)

# 文書目録の編成に関する一、二の問題

——「越後佐藤家文書目録」を作成して——

安藤 正人

1

【史料館所蔵史料目録】第三十八

集は、筆者が担当し、「越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録(その一)」を刊行した。(その一)となっているのは、旧来から当館が所蔵していた佐藤家文書(一九五三年に古書店より購入)に加え、一昨年になって新発見の現地残存文書を佐藤家から大量に受贈し、その結果、現在までにすべての整理を終えることができなかったためである(詳しい事情については、『史料館報』第38号「新収史料紹介」および本目録巻末「解題」を見られたい)。利用者には御不便をおかけすることになるが、未整理分については早い機会に(その二)として刊行する予定なので、御寛恕をお願いしたい。

さて、佐藤家文書は未整理分を合わせれば優に一万点を越すと予想される膨大な文書群であるが、(その一)には六二〇八点を収載した。その全体的な性格を作成・伝来の契機という点から見ると、本文書は、大

別して次の三つの文書群から構成されていると考えることができる。

(A) 一七四二(寛保二)年から一七六八(明和五)年までの二七年間、佐藤家四代当主八平が高田神原領下で岩手組一五ヶ村の大肝煎役を勤めたことよって作成あるいは授受された伝来した大肝煎文書(岩手組文書)。

(B) 近世前期から明治期まで、一時期を除き代々岩手村庄屋・戸長を世襲したことよって作成あるいは授受された伝来した庄屋・戸長文書(岩手村文書)。

(C) 佐藤家の家政・経営に関して私的に作成あるいは授受された伝来した近世中期から昭和期に至る「家」文書。

右の内、(A)の大肝煎文書は、二七年間という比較的短期間のものながら、それだけにかえって貢租収納から人別移動・訴訟争論等に至る組合村行政の諸史料がほぼ完全に近い形で残っているように見受けられ、本文書の最大の特徴と言える。文書類

別の第一基準である出所原則に照らしてみても、明らかに(B)・(C)とは異なる文書群として扱うべき性質のものである。これに較べると、(B)の岩手村庄屋・戸長文書と(C)の「家」文書の区別には若干の困難が伴う。

近世の庄屋文書一般に言えることだが、庄屋としての公的活動と家の経営に関わる私的活動とが時に混淆して文書の上に表われるからである。

とりわけ佐藤家の場合、年番庄屋でなく世襲庄屋なので、その傾向が強いように思われる。しかしながら一七九〇(寛政二)年に家財道具や書画・古文書類の保管台帳として作成された「家財胸控帳」(佐藤家現蔵)

によれば、(B)の岩手村庄屋文書にあたる部分は「御水帳箱・御用算司ノ諸書物除之ニ」として除外されており、佐藤家においても、やはり村の公用文書は他の文書とは異なる認識のもと、独自に保管されていたことがわかるのである。

ちなみに、右の「家財胸控帳」は、尚書器財職佐藤六四郎(五代当主惣左衛門四男)の手になるもので、末尾に「納所職嗜制之事」と題する八ヶ条の心得が記されており、第四条には「一、諸帳面壹紙反故二至迄紛失不致様二心配り第一之事」という

一項も見られる。当時の大肝煎・庄屋クラスの家財・文書管理実態を示す興味深い史料である。これに記載された文書類は、先の区分で言えば、(A)の岩手組大肝煎文書と(C)の「家」文書にあたるわけであるが、実際、保管状況の記録はかなり詳細にわたっている(全文は目録「解題」に紹介しておいたので参照されたい)。たとえば、

不入風風呂棚帳面

上棚

一宗門帳 十七冊 西ノ方隅

外箱入帳瀬戸物棚ノ上ノ壇二置

といった具合である。そしてこれを見て気付くことは、(A)の大肝煎文書と(C)の「家」文書とが(必ずしも完全というわけではないが)棚や箱を違えて別々に保管されている、ということである。

こうしてみると、先の(A)・(B)・(C)の三文書群は単なる理念的な区分ではなく、近世当時から伝来の異なる文書群として認識され、それが保管場所の違いとして表われていると言えるのである。常識的に予想されたことかもしれないが、古書店を経由しているためにもとの保存状況を知り得ない以上、「家財胸控帳」という一史料を通じて近世期における文書



保存形態の原形を確認できたことの意味は大きい。

本目録では、右のような理由にもとづき、(A)岩手組文書・(B)岩手村文書・(C)「家」文書の三分を文書類別の第一基準に置き、これに「支配」「土地」「貢租・諸懸」等々の内容別分類を加えて一大項目・四九中項目の項目編成を行なった。それについては目録を見ていただくとして、ここでは、文書の出所・伝来の問題に關してもうひとつ興味深いことがあるので紹介しておこう。

これは整理の途中で気付き、不思議に思っていたことだが、横長帳面の中に、享保期の甲州幕領村方文書の裏を利用したものが散見するのである。全文書の紙背を確かめたわけではないので例は少ないが、たとえば「享保十九年寅岩手村小形帳」の紙背は、「享保十六年亥九月甲州巨摩郡大下條村当流小前帳」となっている。はじめは甲州市川大門あたりの製紙業地から、漉き返されないうまの反故紙が流通してきたのだろうか、しかし反故にしては年代が近すぎる、などと考え、それなりの注意を払っていた。ところが佐藤家文書には、ほかに信濃・上野・駿河など各地の幕領文書が紙背文書ではな

くきちんとした形で二十点ばかり含まれているのである。なぜこのような文書があるのか。そう言えば、地方書や幕府法制書の類も、通常の庄屋文書に比べて豊富である――。

この疑問は、右の幕領文書や地方書のいくつかに記された二名の人物、すなわち「土肥致栄」と「佐藤半治」の二人の経歴が、目録掲載用の佐藤家系図を作成する過程で明らかになったことによつて、わりと簡単に水解決した。

○土肥致栄――二代八兵衛次男理助、享保六年高田中屋敷土肥八兵衛方へ養子、御代官元締役ヲ勤ム、安永七年没、八二歳

○佐藤半治――四代八平四男、代官江川太郎左衛門・竹垣庄蔵等ノ手代ヲ勤ム、後、佐藤家六代当主ヲ継グ、明和九年没、三一歳

すなわち、佐藤家文書に含まれる各地の幕領文書や地方書は、右の二人が代官元締・手代役にあつたがゆえに伝来したものであり、先に述べた甲州の紙背文書も、その年代や他の史料からみて、土肥致栄が甲府代官奥野忠兵衛(享保九―一九年在役)の元締として在勤中の文書を持ち帰ったものであることが、ほぼ明白になったのである。

一般に、代官所史料は全国的にあまり多く残存しておらず、あるとすれば元締や手代を勤めた家であろうと言われてきた。佐藤家文書に含まれる幕領文書は、まことに少量で断片的であるとは言え、期せずしてそのことを実証する好例となつたのである。それはそれとして、ここで問題にしたいのは、このような文書の出所・伝来のとらえ方、そして目録編成上の位置づけの仕方である。厳密に言えば、(A)・(B)・(C)のいずれとも異なる作成契機を持つものであるから、第四の文書群として独自に扱うべきだし、さらに厳密性を求めれば、土肥致栄関係文書と佐藤半治関係文書とは別の文書群とみなさねばならないのだろう。しかし、伝来の契機という点で言えば、(A)・(B)の文書群が多かれ少なかれ組合村・岩手村の公用文書として認識され、保管されてきたのに対し、右の幕領文書は、(詳しい事情はわからないが)たまたま一族の内の二名の者が、その職業に關連して入手した文書を私的な関心から持ち帰つたものという違いがある。換言すれば、前者は非現行文書でありながら組合村行政・岩手村行政にとつてなお一定の有用性を持つものとして保存されていたの

に対し、後者にはそのような意味での有用性は既に失なわれていたのである。従つて、本目録では文書のそもその作成動機よりも伝来契機の方により着目する立場から、これを広い意味での「家」文書の一部と解釈し、量も少ないので、「代官手代文書」という中項目にまとめるに留めたのである。ただ、紙背文書については、気付いた範囲で注記はしておいたものの、残念ながら「代官手代文書」の項目にまとめて重出するには至らなかった。

## 2

本目録は、筆者にとつて史料館で本格的に担当した初めての目録である。従つて、まだ文書目録というものについてのまとまつた意見を持ちあわせているわけではないが、今一番痛感しているのは、目録編成の理論と方法の必要性ということである。目録編成論というと、すぐに「分類」案のあれやこれやを考えがちであるが、ここで言うのは、文書目録を作成することの意味はどこにあるのか、という根本的な問題から出発するところの、もっと基礎的な議論である。実際、時間が限られた史料調査などで目録を作成する場合に整理・分類をいかに行なうかで頭を悩ますの

は誰しも経験のあるところだし、逆に、当館のようにやや時間をかけて一冊の目録を作ると、今度は何か無駄な努力をしているように言われることがある。しかし私見によれば、

これらは、文書目録とは何かという基本点について共通理解が欠如しているための、少々筋違いの悩みであり誤解であるように思うのである。筆者は、史料調査などの際に現地で短期間の作業にもとづいて作成される「所在調査目録」と、文書群全体の精緻な研究にもとづいて作成される目録（適当な名称が見つからないので、とりあえず「分類目録」と言っておく）とは、初めからはつきりとその役割を区別すべきではないかと考え始めている。

まず「所在調査目録」であるが、これはその名の通り、文書保存の現状の詳細な調査記録として位置づけはどうか。佐藤家文書の「家財胸控帳」を再び持ち出すまでもなく、どの文書がどの棚どの箱にどのような状態で保管されているかは、時に文書の内容以上に重要な意味を持つ。そして個々の文書についてこれが記録され、所在番号が付されれば、文書の当面の出納は可能なのだから、この段階での「整理」や

「分類」は、保存の現状を大きく変更し、必要最小限に留めた方がよいというのが筆者の意見である。

これに対し、便宜上「分類目録」と呼んだ目録の役割は全く違うものである。「所在調査目録」がある文書群の保存状況を克明に記録した文書台帳とするなら、こちらは文書群を最も効率良くかつ科学的に利用するための検索目録である。従ってその目的のためには、個々の文書の内容や機能・文書相互の関連などについての確かな情報が記され、多様な検索要求に応えうる項目編成が成されていなければならないだろう。ここでは目録編成者が文書群の全体についてどれだけ精通しているかが鍵となるのである。その意味で、「分類目録」は、その文書群についての史料学的研究の集積であるべきだとも言える。また、そうである限り「分類目録」は史料学的研究の進展によって改訂される可能性があるわけだから、目録編成作業は、あくまで文書群本体の「整理」とは切り離して行なう必要があるだろう。当面の出納・利用の便宜を優先して文書群の伝来形態を変更することは、この場合であつてもできる限り避けた方がよいと思う。それにしても、日本における文書

目録の作成とその基礎となる史料学研究の現状は、本来その任を担うべき文書館の貧弱さのゆえに、極めて立ち遅れたものであると言わざるをえない。朝日新聞編集委員の百目鬼恭三郎氏は「立ち遅れた日本の書誌学」という文章（朝日新聞八四年二月二十四日夕刊）の中で、「書誌学とい

う土台ができていない近代文学研究などは、インチキな建売住宅のごときものではなからうか。」と書いているが、史料学という土台のない歴史研究とて同じことである。史料学の重要性、またその研究実践の場のひとつとしての目録編成論の必要性を訴えたい。

## 昭和五八年度 新収史料紹介

⑥はマイクロフィルムによる収集を示す。

### 受贈史料

#### 三河国 乗本村菅沼家文書 八名郡

今年度刊行の史料館所蔵史料目録第三九集に菅沼家文書目録を収載することを聞き及ばれた同家ご子孫の

現当主菅沼恵一郎氏（愛知県南設楽郡鳳来町乗本長筋38・39合併地）から、五九年一月お手許に、ご所蔵の左記の史料四冊を御寄贈頂いた。

一 正朔木場仕上帳 安永六―文化五年 一冊

一 乗本村百姓浅蔵父市郎兵衛・百姓源助・名主正兵衛他三拾壱人相手取出訴一件返答書下書 嘉永七年 二冊

二冊

一加茂・鵜飼嶋・江村流木一件書類 明治三十四年 一冊

ご高志のほど厚く御礼申し上げますと共に、刊行目録に収録してご好意にお応えすることにした。なお菅沼家については、次掲の新収史料紹介「⑥三河国 乗本村菅沼家文書」の項を参照されたい。

#### ⑥三河国 乗本村菅沼家文書 八名郡

戦国期の三河の国人衆で武田氏に属した長篠城主菅沼氏を元祖とする菅沼家の初代は天正元年に乗本村に定住したと伝えられる。正保元年、五代定正は乗本村地内の寒狭川と三輪川の合流地点に河岸場をつくり、豊川舟運の開拓者となった。以来同家は回漕業と共に商業活動を営み、

土地を集積し、地主経営を行なった。

同家文書の一部は昭和三二年度に当館に所蔵されているが、今年度刊行の『史料館所蔵史料目録第三九集』

に同家文書目録を収載するに当って昨五八年三月豊橋市美術館と、

愛知大学総合郷土研究所に所蔵されている同家文書の一部をマイクロ・フィルムに収録し、不完全ながらも

当館所蔵史料の内容的充実を図った。内容の詳細については『史料館所蔵史料目録第三九集』を参照されたい。

複写に当って快くご許可を下さ

り種々ご協力を賜った両機関に対し深謝の意を表します。(収録点数、豊橋市美術館(豊橋市今橋町三)所蔵分二三〇点、一〇リール五一九一

コマ・愛知大学総合郷土研究所(豊橋市町畑町)所蔵分一二点、二六コマ)

### ⑤但馬国 出石町長良家文書 出石郡

長良家の先祖は山名氏時代の城地宮内村に居住、天正一〇年出石城に移りに従い、出石町に居屋敷を拜領したという旧家である。城主は文禄四年小出氏、元禄一〇年松平忠国、宝永三年以降は仙石氏五万八千石(天保六年三万石に減封)と交代しているが、長良家は八木町に住し、名主役(のち大庄屋)を勤め、兼ね

て铸物師町及び惣町紺屋を支配した。

天明元年藩の収納会所見習・同六年札場手代、寛政八年御幕口入方筆算年番を命じられ、扶持・切米を給さ

れ仙石家の財用に係わった。明治以後も引続き居町大坊長、明治二年商

法会所御用懸り・商社頭取諸産物方等々に就任して活躍した。収録史料は延宝九年出石町分水帳、天和二年

八木町地子之水帳控、宝暦七・安永九年家屋敷裏判簿などの町方史料、御所務配当取調帳・調達銀証文など

後期の仙石家の勝手賄に関する御用書類のほか、系譜・由緒書など長良家の私文書を多く含み、京都の親戚

からの来状綴は幕末の騒然とした政情をよく伝えている。(収録コマ数二七六五コマ。現蔵者〓京都市左京区一乗寺梅ノ木町二四長良政雄氏)。

### ⑥阿波国 斎田村山西家文書 板野郡

昨五七年度に引続き、阿波国板野郡撫養塩田を背景に幕末・明治期、塩大問屋兼帯船持として活躍した山西庄五郎家の経営史料の撮影を実施した(史料館報38号参照)。

史料所蔵者山西孝枝氏の御好意と鳴門市史編纂事務局の御協力を得て、あらかじめ編纂事務局の一室に史料の搬入をお願いし、九月二六日より

二九日にかけて持時間をフルに活用することができた。大福帳形態の厚い帳簿二四冊をマイクロフィルム二〇リールに収めた。幕末・明治期の

船方勤帳、肥売帳、市郷算用帳、諸国相庭帳、カラフト千島交易手懸帳などであり、幕末・明治期廻船問屋

が全国的に交易を行ったその経済活動の動的状況を把握できる好史料である。残る一六冊の帳簿についても

次年度以降に撮影する予定でいる。

なお山西氏の御紹介を得て、板野郡松茂町中喜来中須に所在する「三木文庫」所蔵史料を拝見することができた。三木家と山西家とは姻戚で

あり、また商取引の関係もあつた。書庫内に入れて頂いて精査したところ、果せるかな「山西取引口」にか

かわる一連の史料の存在を確認できた。後日の再調査を期すものである。

山西家文書撮影に当っては、昨年同様、所蔵者山西孝枝氏、ならびに鳴門市史編纂事務局々長橋本啓司氏はじめ編纂局の方々、また三木文庫の各位から多大の御高配を得た。記して厚く御礼申上げるものである。

(現蔵者〓山西孝枝氏、鳴門市斎田4-1、一部預託〓鳴門市史編纂事務局、鳴門市撫養町南浜字東浜一七〇、二〇リール、一二〇〇〇コマ)

### ⑦摂津国 平野郷町杭全神社所蔵文書 住吉郡

大阪に近接した郷町として栄えた

平野郷町に関する史料が杭全神社に所蔵されている。かねてより当史料館では町方関係史料の充実を心がけ、

何カ所かの町年寄史料のマイクロフィルム収集を実施してきた。今回は大阪市史編集所々長藤本篤氏の御

幹旋によつて、平野郷町関係史料の収集が実現した。所蔵者杭全神社宮司の藤江正路氏にお眼にかかり、史

料館における現在の史料収集・公開閲覧の方式つまりマイクロフィルムによる撮影にもとづいた紙焼本によつて閲覧に供すること、従つて原

本を破損したり汚染したりする恐れのないことを申上げ、撮影の方式としては既に市史編集所撮影済のフィルムからの複製によることとし、後

日、あらためて氏子惣代の方々からの御同意を得て、複製と公開閲覧の許可を得ることができたのである。

杭全神社所蔵の平野郷町史料は、宝永元年より慶応元年に至る「寛帳」一一九冊(うち宝暦七年は虫損甚しく撮影不能)、正徳三年より宝暦七年に至る「平野郷町勘定書替」四一冊、文化元年より慶応四年に至る「背戸口町五人組改帳」五六冊、文化二年

より慶応三年に至る「背戸口町宗門改帳」(各宗派別計二二〇冊)、「背戸口町増減改帳」四六冊、「背戸口町宗門請一札帳」二二冊、その他数冊である。

右の史料について八一リールの複製フィルムを作成したが、予算の関係から紙焼本作成には数年を要するであろう。従って閲覧に供し得るのは紙焼本完成以後のことになるのである。此の点はお含みおき頂きたい。紙焼本完成によつて当史料館での平野郷町史料の公開が可能となるのであるが、公開の条件として、史料閲覧者は必ずその利用成果(論文抜刷など)を所蔵者に提供することが強調された。史料利用受益者にとつて当然の謝意表現の方法であるとはいへ、この条件が付されていることを敢えて記しておくものである。

フィルム複製とその近い将来における公開についてなされた杭全神社藤江正路氏および氏子惣代各位の御高配に感謝し、また複製のためのフィルム貸与の便宜を与えて下さった大阪市史編集所々長藤本篤氏、同所金田稔氏に御礼申上げるものである。(現蔵者「杭全神社」へ藤江正路氏、大阪市平野区平野宮町二一―一六七、八一リール)

## 受贈図書

## 昭和五十七年度(三)

沼津市歴史民俗資料館資料集 3

愛知県歴史関係論文目録(愛知大学総合郷土研究所)

愛知図書館蔵書目録 第2巻

名古屋博物館館蔵品目録 一〇五

皇学館大学附属図書館蔵書目録 久保田

収文庫目録・北岡四良文庫目録・澤鴻久

孝文庫目録

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目録 第二十七集

願成就寺文書目録(近江八幡市立郷土資料館)

京都大学人文科学研究所漢籍目録 上冊

花園大学図書館増加図書目録 一九八一

花園大学図書館逐次刊行物 一九八一

今津文庫目録(同右)

大阪府立大学増加図書目録 第42・43集

新修大阪市史史料目録 第一―三集

県政資料総目録(追録)(昭和57年)(兵庫

県企画部統計課県政情報資料室)

兵庫県立図書館所蔵雑誌・新聞等目録

兵庫県行政資料目録 県の部(同右)

宝塚市史編集資料目録 13

相生市史編集資料目録集 第七号

姫路市史編集資料目録集 III-VI

加古川市史編集資料目録集 1-3

龍野市史編集資料目録集 4-9

尼崎市立図書館郷土資料目録 1・2

東大寺文書目録 第四巻(奈良国立文化財研究所)

奈良教育大学増加図書目録 9

奈良市史資料所在目録 第3集

奈良市行政資料目録 第3集

吉川家文書目録(同右)

図書目録 資料目録(昭和54年3月末現在)(和歌山県議会図書室)

和歌山県古文書目録 8(和歌山県教育委員会)

島根県古文書等所在確認調査報告書(島根県教育委員会)

岡山県総合文化センター郷土資料目録

岡山県内公共図書館郷土資料目録 第23号(広島県立図書館)

頼山陽に関する文献目録(同右)

広島市立中央図書館蔵書目録 第2・3巻

広島市公文書館所蔵資料目録 第3集

広島市行政資料目録 資料編 追録1

(職員研修所行政資料室)

(広島県)海田町史料所在目録(海田町教育委員会)

山口県文書館地方調査員調査報告 9

宇和島市立図書館蔵書目録 第3巻

歴史収蔵資料目録 七(瀬戸内海歴史民俗資料館)

瀬戸内の海事史資料調査報告 第四集(同右)

高知県立図書館郷土資料増加目録(昭和56年度)

高知県立図書館蔵高知県関係新聞(雑誌目録)

高知県史料目録(同右)

高知県立図書館蔵自由民権運動文献目録

九州大学九州文化史研究所所蔵古文書目録 十三・十四

九州石炭産業史資料目録 第八集(西日本文化協会)

福岡県古文書等緊急調査報告書(旧築紫郡)(福岡県文化会館)

福岡県郷土資料総合目録 2(同右)

筑後大本山善導寺歴史資料調査目録(九州歴史資料館)

筑後大本山善導寺目録(同右)

久留米市図書館郷土資料目録 第1集

佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録 索引編

前田家文書調査報告書(佐賀県立図書館)

熊本県立図書館郷土資料増加目録 昭和55年4月、昭和56年3月

熊本県郷土資料総合目録 第2冊分(同右)

熊本市立熊本博物館資料目録 考古・歴

史・民俗資料篇

別府大学文学部史学科所蔵文書編年目録

(第七集) 昭和56年度受入分

(同右) 昭和56年度受入分・56乙群追加

部

大分県行政資料目録 (追録第12・16号)

茨城県立図書館蔵書目録 総記・哲学篇

文学篇 1

群馬県立図書館高橋文庫目録

増加図書目録 昭和56年度(伊勢崎市立

図書館)

神奈川大学図書館蔵書目録 和書 昭和

56年・洋書 昭和56年・雑誌目録 昭和

56年12月末現在

ブルーム・コレクション書籍目録 第1

巻(横浜開港資料館)

伊豆国田方郡那村「川口家文書」目録

(日本大学三島図書館)

小垣江村古文書(刈谷市郷土資料館)

熊村古文書 泉田村古文書 東泉村古文

書(同右)

滝川家近世古文書目録 (第一・三部)

(滝川一美)

びわ湖・水資料目録 第2号(滋賀県立図

書館)

大阪府立大学増加図書目録 第44・45集

郷土資料目録 00(下関文書館)

大日本史料 第一編之二十一・第二編之

二十一・第三編之二十・第五編之二十

六・第七編之二十三・第十編之十七・第

十一編之十七・第十二編之四十九(東京

大学史料編纂所)

大日本古文書 家わけ第十 東寺文書之

七・家わけ第十七 大徳寺文書之十三・

家わけ第二十一 蛸川家文書之一(同

右)

大日本近世史料 市中取締類集 十五・

細川家史料 八(同右)

大日本古記録 小右記 十(同右)

日本関係海外史料 オランダ商館長日記

原文編之四・イギリス商館長日記訳文

編附録下総索引(同右)

鶴見区史

(山形県) 舟形町史

史料叢書 18・19(下関文書館)

(徳島県) 池田町史 下巻

旧各社事蹟(自由民権百年高知県記念事

業実行委員会)

日本のデザイン染め革(サントリー美術

館)

ペリー来航関係資料図録(横浜開港資料

館)

古書展(先人の筆跡)(尾鷲市立中央公民

館)

徳島県立図書館所蔵昭和57年県内出版物

郷土資料関係資料展示目録

史料調査報告 第二十二集(足利

藩研究会)

中央区年表 統明治文化篇・昭和時代V

(東京都中央区立京橋図書館)

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第1集

(宇治市教育委員会)

「城山」中世城郭遺構調査中間報告書(筑

波町史編集委員会)

資料調査報告書 第八集(鳥取県立博物

館)

新編岡崎市民俗調査逐次報告 (1)

石川県史資料 近代篇(9)

新編埼玉県史 資料編21

岩槻市史 近世史料編 IV

統函館市史資料集 第3・4・6・7号

弘前図書館かたりべ双書 第二集

郷土資料叢書 第十三輯(新庄図書館)

山形市史資料 第65号

東根市史(編集資料) 第13号

米沢市史(編集資料) 資料 第七号

山形県教育史資料 統計篇 第三卷(山

形県教育委員会)

(茨城県) 岩間町史資料集 第二号

所沢市史調査資料 21

八潮市史調査報告書 6

千葉県史料 近世篇 文化史料一

成田山靈光館(史料館) 図録 第1集

成田山史料館図録 第2集

府中市郷土資料集 6(府中市教育委員

会)

稲城市文化財調査報告書 第七集(稲城

市教育委員会)

延喜式内社類城十三座の研究 (1)(花ヶ

前盛明)

居多神社と越後国一宮(同右)

春日山城とその城下町の研究(直江津高

校社会部)

石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研

究(高樹文庫研究会)

甲府の歴史と文化(甲府市教育委員会)

真田家文書 中巻(長野市)

旧信濃国善光寺平家農大鈴木家文書(森

安彦)

歴史をたずねて(刈谷市教育委員会)

徳川家康生母伝通院殿於大の方(刈谷市)

刈谷水野氏の研究(同右)

幕末・維新のかりや(同右)

明治・大正のかりや(同右)

大阪市史料 第八輯

大槌島大曾瀬論争資料集(玉野市教育委

員会)

津山市文化財年報 1(津山市教育委員

会)

御銀主細川家の古文書(猪井達雄)

小野田市史年表

香川の化石(高松市)

九州の寺社シリーズ 2・4(九州歴史

資料館)

菊地市史 上巻

(宮崎県)新富町の埋蔵文化財(新富町教

育委員会)

旧記雑録参考資料(一)(鹿児島県維新史料

編さん所)

那須政隆祝下講話集(成田山福祉文化研

究会)

明治以降神社関係法令史料(神社本庁明  
治維新百年記念事業委員会)

FAULKNER'S THEME OF NA.

NATURE (Yoshizaki Yasuhiro)  
携行筆記具矢立について(神奈川大学日  
本常民文化研究所)  
大阪人 第37巻第1号(大阪都市協会)

## 昭和五十八年度 (一)

(青森県) 浪岡町史資料編 第十三集

青森県議会史 自昭和三十八年至昭和四  
十一年

鹿角市史資料編 第八集

秋田県教育史 第三巻(秋田県教育委員  
会)

山形県史 資料篇 18

南陽市史編集資料 第9号

近世一農村における家族構造についての

一考察資料(大橋由香)

(福島県) 棚倉町史 別巻三

会津藩 家世実紀 第9巻(家世実紀刊  
本編集委員会)

いわき市水道史(いわき市水道史編さん  
委員会)

いまいち市史 通史編 I

史料調査報告 第二十三〜二十六集(足  
利藩研究会)

群馬県史 資料編 22

(群馬県) 新田町誌基礎資料 第四・五号

高崎市文化財調査報告書 第31〜35集

(高崎市教育委員会)

鳩ヶ谷市の古文書 第八集(鳩ヶ谷市教

育委員会)

(埼玉県) 大井町史料 第十五集  
春日部市史 第三巻  
わたしたちの郷土習志野(習志野市企画  
調整室広報課)

国分寺市史料集 III

(東京都) 羽村町史料集 第十集(羽村  
町教育委員会)

青梅市史料集 第二十九・三十号(青梅  
市教育委員会)

写された港区 三(港区立みなと図書館)

鎌倉国宝館図録 第二十五集

大野市史 藩政史料編 一

(山梨県) 小菅村郷土小誌

長野県教育史 第三巻・別巻二(長野県教  
育史刊行会)

新編一宮市史 資料編 補遺四

刈谷町庄屋留帳 第十巻(刈谷市教育委  
員会)

西尾市史 六

愛知県議会史 第十巻

龍野市史 第六巻

古文書調査記録 第一〜四集(福山城博

物館友の会)

防長寺社由来 第三巻(山口県文書館)  
(徳島県) 驚敷町の古文書(驚敷町町史編  
纂委員会)

(高知県) 佐川町史 上・下巻

鹿児島県史料 旧記雑録 後編三・斉彬

公史料 第三巻(鹿児島県新史料編  
さん所)

西園寺公望と原敬特別展示目録(衆議院  
憲政記念館)

日本の鉄砲(大阪城天守閣)

経済史文献解題 昭和57年版(日本経済  
史研究所経済史文献編集委員会)

日本史事典(平凡社)

字典かな(浅井潤子)

写本の読み方(同右)

図書寮蔵刊 新修本草 残巻・壬生家文  
書 五(宮内庁書陵部)

新潟県遺跡地図(昭和54年度版)(黒瀧裕

(岩手県) 大迫町史(教育・文化編)

文書による郷土的なレファレンス質問に  
対する回答事例 第二(1)(仙台市教育  
委員会)

仙台市文化財パンフレット 第7集(同  
右)

仙台市文化財調査報告書 第46〜48集

(同右)

国典類抄 第十二巻(秋田県立秋田図書  
館)

米沢市史 資料篇 2

村山市史編集資料 第12号

本間家土地文書 第八巻(農業総合研究  
所)

鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書 下巻(鶴岡市  
史編集会)

(山形県) 最上町史編集資料 第九・十号

東根市史編集資料 第14号

米沢市史(編集) 資料 第十号

葛籠 一・二(新庄市教育委員会)

寒河江市文化財調査報告書 第一集(寒  
河江市教育委員会)

寒河江市埋蔵文化財調査報告書 第二集  
(同右)

(福島県) 塙町史 第3巻

みんなの調査相談室事例 第2集(福島  
県立図書館)

東松山市史 資料編 第3巻

岩槻市史料 第十五巻

河童のわび証文(東松山市教育委員会)

成田市史 近代編史料集 四・五

(千葉県) 袖ヶ浦町史 史料編 II

府中市の歴史

須原家文書 1・2(江戸川区教育委員  
会)

江戸川区郷土資料集 第12集(同右)

江戸川区の文化財 二(同右)

真宿遺跡予備調査報告書(八王子市教育  
委員会)

若越遺跡予備調査報告書(同右)

東京・八王子石川天野遺跡(同右)

郷土資料館資料シリーズ 第22号(八王

子市郷土資料館)

嘉留多遺跡・砦中学校7号墳(世田谷区教

育委員会)

下山遺跡 I 一九八二(同右)

堂ヶ谷戸遺跡 I・II(同右)

藤沢山日鑑 第一卷(藤沢市文書館)

新潟県史 資料編 1・4・11・14・19

柏崎市史資料集 地質編

松任市史現代編 下巻

(石川県) 能都町史 第五巻

福井県史 資料編 10

長野県史 近世史料編 第四卷(三)

郷土の民族 民話(上田市立博物館)

(岐阜県) 藤橋村史 上・下巻

(静岡県) 新居町史 第五・六巻

図書館郷土資料叢書 04(沼津市立駿河

図書館)

沼津資料集成 10(同右)

関口隆吉旧蔵明治初期名士書簡集(静岡

県立中央図書館)

元禄天保明治遠江国石高表(磐田市誌編

纂委員会)

豊橋市史 第三巻

新修稲沢市史 研究編 五

明治以降愛知県史略年表 政治編(愛知

県文化会館図書部)

松阪市史 第十五巻

史料京都の歴史 第2巻(京都市)

藤井寺市史 第六巻

枚方市史資料 第七集

大阪市史資料 第九輯

東大阪市史資料 第三集(七)

尼崎市史 第9巻

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第2集

(宇治市教育委員会)

美祿市史

(徳島県) 池田町史 上巻

(徳島県) 川島町史 上・下巻

(愛媛県) 城辺町の文化財(城辺町教育委

員会)

直方市史 資料編 上・下巻

佐賀県史料集成 古文書編 第23巻(佐

賀県立図書館)

大分県史 先史篇 I・近世篇 I

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報

III(宮崎県教育委員会)

八王子市郷土資料館15年史

サントリー美術館ニューヨーク展プレ

ビュー(サントリー美術館)

徳川十五代將軍展目録(読売新聞社)

総合資料日本史(浜島書店)

明代西南民俗史料 第一冊(東洋大学ア

ジア・アフリカ文化研究所)

新稿一橋徳川家記(徳川宗敬)

新収日本地質史料 第三巻・別巻(東京大

学地質研究所)

水族写真と著者奥倉辰行(魚仙)の生涯と

その業績(松井 魁)

石炭研究資料叢書 第四輯(九州大学石

炭研究資料センター)

やきもの入門(平凡社)

伊藤嘉明舞台美術展(国立劇場)

内閣文庫所蔵正保城絵図 II-5

新室蘭市史 第二巻

青森県立郷土館調査報告 第14・15集

青森県歴史の道調査報告書 松前街道

(奥州街道②)・大豆坂通り・羽州街

道・乳井通り(青森県教育委員会)

北上市史 第八巻 近世(6)

南部絵巻(岩手県立博物館)

東北歴史資料館資料集 6

(茨城県) 藤代町史資料写真集 米づく

り今・昔

新編埼玉県史 資料編 4・13・19・別冊

与野市史 文化財編

八潮市史 史料編 近代II

岩槻市史 古代・中世史料編 I・II・考

古資料編

岩槻市史料 第十六巻

(埼玉県) 大井町史料 第二十四・二十

七集(大井町教育委員会)

文化財調査報告 第13集(同右)

(埼玉県) 寄居町史 近世資料編

寄居町史資料集 寄居町の自然地学編

浦和市史調査報告書 第十四・十五集

八潮市史調査報告書 7

我孫子市史資料 金石文篇 III

我孫子の歴史を学ぶ人のために 一・二

大田区史 資料編 去社?

大田区指定文化財地図(大田区教育委員

会)

大田区の文化財 第十九集(同右)

大和市史 2

平塚市史 3

近世平塚の領主たち(同右)

平塚市史民俗調査報告書 3(同右)

富山県史 通史編 IV

長野県教育史 総目次(長野県教育史刊

行会)

袋井市史 史料編 四

(愛知県) 渥美町史 資料目録編

名古屋叢書 三編 第十七巻(名古屋市

教育委員会)

藤井寺市文化財 第四号(藤井寺市史編

さん室)

赤穂市史 第二巻

文化財めぐりシリーズ V(和歌山県教

育庁文化財課)

岡山県史 第一・十五・十六巻

松山市史料集 第五・十一巻

資料報告書 第一・九集(高知県立郷土

文化会館)

福岡県史 近世史料編 福岡藩初期上・

近代史料編 三池鉦山年報・農務誌漁

業誌(西日本文化協会)

本渡市文化財調査報告 第2集(本渡市

教育委員会)

春嶽公記念文庫名品図録(積善会)

(以下次号)

# 彙報

## ○史料の収集

今年度は、三河国八名郡乗本村菅沼家文書（地主・畑漕業）の寄贈を受けたほか、次の四件について、マイクロフィルムによる収集を実施した。阿波国板野郡斎田村山西家文書（堀大問屋兼船持・摂津国住吉郡平野郷町杭全神社文書（平野郷町史料・但馬国出石郡出石町長良家文書（大庄屋）・越中国射水郡嶋村折橋家文書（十村）。以上については、本号「新収史料紹介」を参照されたい（折橋家文書については、次号に掲載）。

このほか、特別研究「近世史料の古文書学的研究」の一環として、昨年度に引き続き、新潟県上越市立高田図書館所蔵神原家文書（大名）・岡山県津山市立津山郷土館寄託玉置家文庫（津山町大年寄）のマイクロフィルムによる収集を実施した。

## ○史料の所在調査

大阪府泉南郡熊取町教育委員会保管中家文書と京都市中京区室町通冷泉町松井隆治氏所蔵冷泉町文書の二件について実施した。前者の詳細は本号「史料所在調査報告」を参照されたい。後者の調査報告は、次号に掲載する予定である。

## ○史料目録の所在調査

今年度は、次の二機関が所蔵する史料目録類について、調査をおこなった。岡山県総合文化センター・岡山大学附属図書館・岡山県史編纂室・兵庫県立図書館・神戸市立中央図書館（以上、一月二五日～二八日）、三重大学附属図書館・三重県立図書館・尾鷲市郷土館・和歌山大学附属図書館・和歌山県立図書館（以上、二月六日～一〇日）、熊本県立図書館・熊本大学附属図書館（以上、三月二二日～二三日）。

料目録類について、調査をおこなった。岡山県総合文化センター・岡山大学附属図書館・岡山県史編纂室・兵庫県立図書館・神戸市立中央図書館（以上、一月二五日～二八日）、三重大学附属図書館・三重県立図書館・尾鷲市郷土館・和歌山大学附属図書館・和歌山県立図書館（以上、二月六日～一〇日）、熊本県立図書館・熊本大学附属図書館（以上、三月二二日～二三日）。

○近世史料取扱講習会  
第二九回近世史料取扱講習会は、昨年一〇月三日～七日に京都府立総合資料館一〇月一七日～二二日に国文学研究資料館でそれぞれ開催された。第三〇回講習会は次の通り開催される予定であり、追て受講生募集要項を発送する。  
一、昭和五九年一〇月一日～五日、於京都府立総合資料館（京都）  
二、昭和五九年一〇月一日～五日、於国文学研究資料館（東京）

○評議員会の開催  
本年三月一六日に国文学研究資料館評議員会が開催され、昭和五八年度事業報告・昭和五九年度事業計画等についての議事が評議された。  
○運営協議会の開催  
昨年十一月一九日および本年二月二八日に国文学研究資料館運営協議員会が開催され、昭和五八年度事業報告・昭和五九年度事業計画等についての議事が協議された。

れた。

## ○館内研究会

第七二回（昭58・9・22）  
文書館学序論 安澤 秀一  
史料所在調査法 山田 哲好  
第七三回（昭58・11・8）  
「真田家家中明細書」の翻刻について 原島 陽一  
第七四回（昭58・12・20）  
「三河国八名郡乗本村菅沼家文書目録」の作成について 鶴岡実枝子  
第七五回（和58・12・22）  
近代史料概論 大阪大学教授 山中永之佑  
第七六回（昭59・1・24）  
「近世史料の整理と管理（仮称）」の刊行構想について 大藤 修  
安藤 正人

## ○定期刊行物の発行

### 1 「史料館研究紀要」

昨年一〇月に第一五号を刊行、第一六号は本年一〇月に刊行予定。

### 2 「史料館所蔵史料目録」

第三八集「越後国頸城郡岩手村佐藤家文書（その二）」を昨年一〇月、第三九集「三河国八名郡乗本村菅沼家文書目録」を本年三月に刊行。第四〇集「信濃国松代真田家文書目録（その三）」は、本年九月に刊行予定。

## 3 「史料館叢書」

第六巻「徳島藩職制取調書抜下」を本年三月に刊行（東京出版会）。

## 4 「史料館報」

昨年九月に第三九号、本年三月に第四〇号（本号）を刊行。第四一号は、本年九月に刊行予定。

## ◎閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。お知らせいたします。  
四月二五日（月）～五月四日（金）

## 史料館報 第四〇号

昭和五九年（一九八四）三月三二日発行  
編集・発行 東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇 国文学研究資料館内

国 立 史 料 館  
電話（七八五）七二二一（代）  
印刷所 東京都文京区小石川一ノ二ノ七 勝美印刷株式会社  
電話（八一二）五二〇一（代）